

座談会

日本に於ける女子スポーツの夜明け

—日本の女子陸上界硬式テニス界を中心に—

出席者 平野久子 (旧姓・梶川)

福田富美子 (旧姓・田村)

聞き手 村田修子

輿水はる海

ずっと以前から、「是非実現したい」と思っていることがありました。私事で恐縮ですが体育の島、特に陸上競技をしていた関係もあって、NHKの「ヨイドン」でとり上げられた人見絹枝さん以前の、日本の女子の陸上競技の発生の時期に活躍をなさった方々が大変身近におられることを知っておりましたので、この世界のためにも、どうしても当時のお話しを伺っておきたかったです。

しかもその方々は、現在空前のブームをよんでいるテニス界におきましても草分け的な存在で大変有名でいらっしゃるのです、これ等のことを知ることは、多くの方々にとりましても、意義のあることと思われまます。

その上、お話し下さいましたお二人は、お茶の水の幼稚園を経て女学校にいらっしやって活躍なさった方々ですので、当時の幼稚園の様子などについても何うことができました。

そのお二人のプロフィールを御紹介します。

福田(田村)富美子様と平野(梶川)久子様は共に現在東京にお住いでいらっしやいます。「ああその方々は、田村・梶川組といつて、ペアを組んでテニスで活躍された方々でしょう」といわれるように、多くの方が御存知でいらっしやい

ます。

おふた方とも、じきに八十歳に手が届きそうなお年でいらつしやるにもかかわらず、大変若々しく、お元気で今なおいろいろの面で御活躍なさっていらつしやいます。この対談の一週間あとに、福田様は庭球の試合の応援にスイスへお出掛けになられたほどの御活躍です。

なお、この対談には編集員のほかに、学生のとき、ささやかながら女子高等師範学校に陸上部を私と共に作り、一緒に練習をしていた、現お茶の水女子大学の教育学部舞踊教育学科で体育史（特に女性の）を御研究していらつしやる輿水はる海先生に御参加頂き、専門的な見地からお話しを進めて頂きました。

ただお詫びしなければならないのは、対談中、お写真を見たりしながら話し合っていたために総てをお二人の旧姓で進めてしまいました。そのことを途中で気がついたのですが、そのほうがよりよく当時のふん囲気が出るのではないかしら、という思惑で、そのままにさせて頂いてしまいました。どうぞお許し下さいませ。

（村田 記）

村田 今日この様にお目に掛けることができて、こんなにうれしいことはありません。前々からは是非お話しを伺わせて頂きたいと思っておりましたことなので、どうぞよろしくお願い致します。また、当時の幼稚園のこともなどもお話し頂ければ幸いです。

先ず当時としては、スポーツをすることは特別のことだったように思われますけど、どういうことが一番思い出されることございますか？

田村 次第にいろいろなスポーツがやられるようになってきましたが、お茶の水ではまだリレーレースをやっているんです。「他の学校は運動会にリレーレースを採用していらつしやるのに、なぜ、お茶の水は採用して下らないんですか。」って臨教をお出になって、初めて私達のほうへ体操を教えにいらしていた、田中せき先生に申し上げて、教員会議で先生方に計って頂き、それで、やっと初めて、リレーレースが運動会に加えられたんです。そして、三年生は暴れん坊だから、専攻科三年の袴をはいている組と組まされました。チームを四組作りまして、それで、リレーレースをやるうっていうことになりました、私がラストで、私が走る時は、——お

茶の水の女学校の校庭っていうのは小さいので、コーナーが多いんです——それで、初めのコーナーでひとり抜いて、次のコーナーでひとり抜いて、そして、一等地なっちゃったんです、私達の組が。それで、もう、うれしくって、皆で写した写真があるんです。

村田 ああ、そうでございますか。女学校の時に。

梶川 ええ、これは、女学校の時に、初めて、お茶の水がリレーレースを採用なさって私達のクラスが勝ちました時の写真です。

田村 こうしていろいろな写真を見ていきますと、歴史とか何とか言うことじゃなくて、起源が、こういうふうにして成り立ったという事は、やっぱり残さなければならぬと思います。

「ヨイ ドン」 以前の話

村田 私どもに、よくわかりませんのでお聞きしたいと思っております。庭球界で大変有名でいらつしやいますね。私も運動のほうの出で、やっぱり府立第一高女で陸上競技をしております。そのときは寺尾さん姉妹たちの時代に次いで二番目

に盛んな時でございます。私どもの時に、全国制覇をいたしました。その陸上の集りの時に、斎藤しずゑさんとおっしゃいます方が、やはり、お茶の水高女の時に陸上をしていた、とおっしゃるので、お茶の水高女も陸上競技が盛んであった、という事は少しは何っておりましたけれど、このあたりのお話しを伺いたいと思つて。

本場に、これは、長年、そう思つておりました。それで、この間、ちょうど小学校の運動会の時に田村様にお目にかかったものだから、ちょっと、お願いいたしましたね。それで、今、この持つてきて頂いた御本見せていただいておりますら、ここにいらつしやる平井さん、この方が、「女子は女子だけで会を持つたらいいんじゃないか」ということで、その平井さんが「女子陸友会」のお世話をして下さったのです。その会の写真を、今、偶然見つけまして、大変なつかしく思つておりました。その会がずっと続いておりました。田島直人さんの奥様の、土倉麻さん、ロサンゼルスオリンピックへ行った方とか、御子柴さん、浅野さん、永田さん、それから、織田幹雄さんの奥様、其の他、陸上競技をしていた方々の会合で、秩父宮妃殿下も御出席下さいま

す。

梶川 陸上競技の織田さんは、今でも、OB会のほうでお目にかかっています。

村田 そうでございませうか。私共ですと、そういう会の時は、陸上競技関係だけのお話しなのですけれども、テニスのほうでも有名でいらっしやいまして、そこいらが、私共の感覚と、ちょっと違うんでございます。そのへんをお聞かせ下さいませ。

梶川 ああ、そう。こちら田村様は、駆けるのがお速いんですよ。それで、初めはテニスね。陸上はなかつたんですけど、運動会のランニングは、いつも一等とってらしたんです、テニスは、あの頃は、軟球でございませう。そして、私が、前衛なんでございますの。それで、田村様が後衛で、私が「頼む。」って言うのと、こっちの端から、あっちの端まで、お駆けになるの、それが、間に合うんですよ、速いからね。実に、頼もしいんですよ。こっちは、もう、バーンをやるだけなんですけれど、頭越していったのは、「頼む。」って言いますと、こっちに居ましても、こっちの端まで届いちゃうんですの。ですから、足の速いってことは、すぐ後衛にはいいんで

ございますね。硬球になっても、いいですよものね、前にも駆けられるし。だいたい、足の速いですが、お上手なんじゃないんでございませうかね。テニスじゃなくて、「足ニス」だなんて言われました。

田村 それで、学校は、テニスにしても陸上にしても、ひとつも、奨励はなさらない。私達が極東大会に行くのも、黙認。あの時は、私は卒業してたけど、黙認なんです。

梶川 ふだんの練習でもね、ちょっと時間が遅れると、先生が、ちゃんと時計もって、「早く、お帰んなさい。」って、やかましかったんです。

田村 「一時間の期限以上に練習した。」なんて、祝勝会に、先生に怒られました。

梶川 他校との試合なんて、全然なかったんです。

田村 そりゃあ、始まりは、東京都下に庭球大会ってものがございませんで、府立第二のほうに、金栗四三先生がいらっしやあって、それで、府立第二の方たちをつけて、お茶の水にいらして、テニスをしたり、バスケットをしたりして、お互いに遊びまして、こちらからも向こうへ行って遊ぶってふうなことをしておりますうち

に、時事新報の森重さんって方が、「大阪でも女学生の庭球大会があるんだから、東京でもやりましょう。」って言って、時事が提言して始まりました。

梶川 大阪のほうが、何でも先だったのね。これにも書いてあるけど。

田村 テニスが始まってから、陸上のほうも始まりまして、YWCAだったかしら、青年会か何かが主催で、お茶の水のグラウンドで、女子のが始まったんです。その時は、私達、テニスだけでした、大正十一年の秋に、全日本女子陸上競技っていうのが、初めてできました、それで、戸山学校のグラウンドであるって時に、私も出ました。お茶の水は、普段の訓練ってことをよくして下さってますから、初めて出たんでございますけれども、私も、百米と五十米と四百米リレー、三百米リレー、その予選・決勝みんな一等とっちゃいました。朝から夕方まで駆けづめで、お昼はサンドウィッチふた切れくらいしか、食べる暇がないんです。それだけしましても、翌日、平気で学校へ行かれたんですね。ひとつも、くたびれたっていう感じなしに、行かれたんでございますけれども、まず、先生に叱られました。「あなたは、昨日、

靴下を脱いだそうですね。女の子がそんなことではいけません。もっと慎ましやかにしなさい。」って。何も、お誉めの言葉、ないんです。

村田 その時の主事先生はどなたでいらっしやいましたか。校長先生と申し上げるんでしょうか。

田村 極東大会の時は、藤井先生が主事だったのよね。

梶川 私達は、それで、極東大会も、「黙認しますから、行ってきなさい。」ってことで、藤井先生がそうおっしゃいまして、それで行きました。

村田 ああ、そうですね。

田村 ですから、何て言うんでしょうか、学校は、やっぱり、評判がどうなるかってことを恐れてらしたんですね。「全国の模範になるべき学校があんなことをした。」って言われちゃ大変だと思っちゃしたんですね。だけど、私など、母に早く亡くなられました、ひとり娘だったものですから、祖父も父も医者で、祖父は学校時代に、朝五時頃出かけて、吾妻橋のけいこ場でボート漕いだような特別暴れん坊だったもんですから。そして、また、イギリスがあんなに立派に暑い土地を統治している

のは、みんなスポーツで鍛えてるんで、スポーツは大事なんだ。ことに私なんか、「おけいこは、何もしなくていいから、体を鍛えろ。」って言うような、スポーツに理解のある曾祖母に育てられましたものだから、私が試合なんてなりませんとね、先生おわかりになるか知らないけど、なた豆って、ご存知かしら。

村田 はい。

田村 なた豆切りましたら、「一」っていう字になりますでしょ。で、朝のごはんの時、なた豆を古漬けにしてありますで、それを切って出してくれる、「一位になれ。」って。そして、出る時は、昔は神棚に、このカチカチがございましてしょ。玄関でカチカチやって、「しっかりやっておいで。」って銭形みたいね。ですから、先生がいろいろおっしゃっても、そういうことは、あんまり耳に入らなくて、「いいことしてるんだ。」って思って、私達はやっておりましたから。別に、それほど気にしなかつたんですけれども。弱い方だったら、あんなふうにされたら、いやだったろうと思います。

村田 陸上競技もなさいますし、テニスも、それから、他にも、いろいろとなぎったのですか。

田村 スキーもまいました。

梶川 何でもね。あの頃、運動があれば、何でもやりましたね。ポートまで漕ぎましたね。

田村 隅田川で、府立第二高女の人と、競争しました。

梶川 第二の方と、高等師範のポートを拝借してやりました。

村田 それで、お二人じゃございませんでしょ。

梶川 あと、お茶の水からはテニスの仲間が五、六人おりました、みんなちょうど、兄達が高等師範の附属におりますでしょう、そんな関係で、とても、お茶の水と高等師範ってのは仲が良かったんでございますよね。だもんですからね。よくポートを借りまして、漕いだものです。

田村 中学生ではなく、マラソンをしていらして、みんなが「パパ、パパ」と呼んでいた金栗四三先生、山岸徳平先生が、お若い頃ね、私達の監督みたいになつてくれました。

村田 ああ、そうですか。それで、ポートといいますが、今のポートレースのですか。

梶川 八人乗りのです。

村田 ああ、エイト。

梶川 すごいでしたよ。重たくって。

田村 オールがね、長く。もう、二番だか三番だか、漕がされて。

梶川 もう、しまいになりますと、笑っても、おなかの皮が痛いんですよ、あれ。あんまり伸ばすから、おなかの皮が、笑っても痛くて、私はつらかった。

田村 よくね。流しちゃえばいいのに、いつまでも、頑張ったりなんかするから。

梶川 やっぱり頑張っちゃうのねえ。でも、何でもいきましたの。馬だけしなかったかな。重たくて、かわいそうで。

村田 ああ、そうでございますか。それじゃ、別に、今のように何の選手、ということではなく、いろいろなものをなさったのですね。

梶川 今でも、ほとんど、私、お医者さんにかかりません。丈夫で。

村田 ああ、それはよろしいですね。

梶川 健康診断に、老人健診に行くだけでございま

す。おかげさまで、若い時に鍛えたってことは、やはり、いいことでございますね。

田村 体は、お婆ちゃんになっても、気持ちだけは、お婆ちゃんにならないわね。

梶川 それで、割合に、逆境に立っても耐えられるって……。スポーツって随分つらいでございますし。う。それ、がまんして、くいしばってやらなければならぬんですからね。試合なんていったら、自分がいくら体調が悪くても、学校のためなら、くいしばって出ななきゃならない。そういう頑張りが非常に役に立っております。

村田 はあ、そうですね。私も、そう思いますけど。

梶川 確かにそうですね。人の言うこともああいう人だと思えば苦になりませんしね。

田村 スポーツはすべてですけど、ことにテニスのダブルスは、お互いに助け合う気持ちだが、根本になければ、成り立ちません。その気持ち、小さい時から培われているということ、いいことだと思いますね。

村田 そうですね。今、大変、テニスブームで。

田村 本当ですね。

梶川 今は、幸せですよ、みなさん。

田村 それもねえ、もう少し、気分的な面、精神的の面と体の面とに、身を入れて下さるといいのよね。

梶川 本当に、つらいのに耐えられないわね、今の方は。どっちかって言うとうと。

村田 そうでしょうね。

梶川 もう、つらいことや、いやなことがあったら、すぐ、やめちゃうほうじゃないのかしら。

村田 本当に、庭球のことで、いろいろとお話しを伺ってはありましたんですけれど、この間、陸上の話を聞かせていただきましたのでね。私共から考えますと、私も府立第一の時、体育館のギャラリーに陸上競技部の記録、例えば橋本さんとか、勿論、寺尾さん姉妹の写真が飾ってありまして、ハイジャンプでしたら1メートル11、日本新記録なんて書いたのが飾ってあった……。こういう思い出があるんです。今の今まで私は、お茶の水の女学校で陸上競技が大変盛んであったというのを、よく知らなかったのですが。

田村 全然、先生がタッチしてらっしゃらなかったから、記録もお残しになりませんものね。

梶川 もう、学校が何もタッチしなかったわね。たゞ

体操の先生と、田中せき先生とが個人的にコーチして下さったくらいね。「名前、出すな。」っておっしゃったんですもの。「試合に出ても、お茶の水ってのを出さないで、個人的に出ろ。」って、おっしゃるのね。

田村 それ式なんですから。学校が、記録をお残しにならないわけ。私達がやっていること、いいことだと認めて下さってなかったんです。

梶川 だから、おそらく、どこにもわからなかったんでしょうね。どこの学校でも、寺尾さんは、私達の、ちよつと後でしたけどね。

田村 ええ、寺尾さんが後で、寺尾さんと人見絹枝さん達と一緒にございました。私達、一番最初。

梶川 御子柴さんが同時頃かしら。

田村 御子柴さんは、全日本にも、お出になったんですけど、その前になさったので有名なんです。

梶川 その前って？

村田 水泳をしてらっしゃいましたね。

田村 飛込みもなさいましたしね。

梶川 あの方、運動家だった。

村田 御子柴さんのために、お父様がつくったというプールが、今の深大寺のほうにございまして、そこへ、くしくも、府立第一高女の運動場ができました。今では、池になっていて、もう泳げないものでしたけれど、まわりが木で、五十メートルございました。その頃、私は女子陸友会で、御子柴さんと一緒にすることがありましたんで、「御子柴さんの泳いだプールが、あそこにありますよ。」と申しますと、「そうなの。あれ、父が練習に作ってくれたの。」って言ってらっしゃいましたけど。その時代は、やはり、いろいろな運動をなさってらしたわけですね、みなさん。

梶川 そうでございますね。やっつてはいたんですけど、テニスだけですよね、試合に出たのは、大正十二年に。

田村 これが、その戸山学校の時の写真です。

村田 でも、こういうの、よくっておかれましたね。

田村 親戚の者が、とって、しまっておいてくれましたので、私の里にはございませんでしたし、また、私が持ってきてたら、焼けてしまっているわけなんでござい

ますけれども。

村田 ああ、そうでございますか。本当によかったですね。

編集部 これが当時、絵ハガキになっていたのですね。

梶川 プロマイドで売ってたのね。

田村 そうなの。

梶川 それね、試合の最中に大阪で、もう、どんどん売ってましてね。私の、こんな足上げたのがあるですよ。それ全部、絵ハガキだったんです。「私、いやだわ。みつともなくて。」って言ったら、買い占めて下さったの。こんなにありましたよ。

田村 極東大会の時なんか、コートの下の方に、幕なんかございませんから、応援したり、見て下さる方たち、ずっと下の方に座っているわけですよ。そういう人たちが、みんな、大阪はとても弥次が多くてね、「えーぞ、えーぞ。」って、大きな声、出すんですよ。その時、いやだったわねえ。

梶川 今は、こう、下の方は幕があって、球も見い

村田 今のスター並みでしたのね。この時は、軟式ですか、硬式ですか。

田村 極東大会ですから、硬式です。でも、軟式から変わったばかりですからね。

梶川 でも、大して変わらないですね。今のボルグでも何でも、見ていると、軟式みたいね、やり方。

村田 そうですね。

梶川 だから、あれ、あの通りに、ほら、福田さんのご主人（庭球界の大御所）たちは、硬式は、何とか式って言って、違ってらしたけどね。「上の方からバーンとやれ。」とか何とか言って。今の外国の選手は、ドライブかけてますよ。軟式やってれば、硬式もできると思うんですの。それで、中国の人たちが、「なんで、日本人は、あんなにうまいんだらう。」って言いましたよ。あっちは、急に硬式に変わってきたでしょ。こっちは、軟式やっってから硬式に入っているから、まあ、試合も慣れてるし、試合運びもうまかったです。

田村 そうね、0—1くらい。

梶川 2セットしても、1点くらいしか入ってないんですよ。ですから、「日本人て、どうして、あんなたテ

ニスがるまいのかしら。」って言われましたからね、「昔から、軟球ってものがあって、軟式をやったから、できるんだ。」って、誰か説明したようでしたけどね。ただ、打ち方が、ちょっと、トップで打つのと、あれが違うけど。

村田 初めに、軟式みたいになると、すっとなでいてしまいますけど、とぶということだけわかれば、できるのかも知れませんね。それで、軟庭っていうのは、一体、いつ頃からでしたんでしょうか。

田村 私の母もやっていましたよ。それから、それはもう、前からだと思えます。

梶川 私達が生まれる前ぐらいから、あつたんじゃないでしようかね。よく、袴でかくして、テニスやっていたなんて、お婆ちゃま方、言っていたから、随分前からあつたんじゃありませんか。

田村 お茶の水でも、やっていたようね。

村田 でも、私達が学生の時に「こんちゃん、こんちゃん。」って呼んでた、家事的理科つてのを教えてらした、大学の近藤耕造先生が、テニスの発展に力を尽されたということも思いもありませんでしたし、初めて伺っ

たことでございます。

〔輿水先生がいらっしゃる〕

村田 今、こちらの大学の体育のほうにいらっしゃいます、輿水さんとおっしゃいまして、上田俊ちゃんも知ってらっしゃいます。

輿水 これは、当時のものですか？ 素敵なものをお持ち下さって。楽しみです。

村田 ええ、そうなんです。今、それを見せて頂いておりましたの。

輿水 歴史的な方々に、お目にかかれて……。だって、一番大事な時期を開いて下さった方たちで、もう、うれしくて、ゆうべから、わくわくしておりました。

梶川 歴史上の人物になっちゃって。

輿水 いえ、本当に、女性の一番草分けでいらっしゃいますしねえ。

梶川 そうなの。私が明治三十八年生まれでしょ、生まれが。こちらは早生まれで三十九年なんですの。ですから、もう七十八。歴史上になっちゃいましたね。

輿水 七十八。お若いわね。

梶川 これも、スポーツのおかげです。

輿水 そうですか。十引いても、まだ、十五くらい引かなくちゃ。素敵ですね、あこがれちゃいます。

日本のはいからなユニフォーム

輿水 これ御存知でしたか。これは、二階堂とくよ先生がイギリスから持って帰られて運動する時、ここの学生に着せたチュニックなんです。

村田 この学生にも着せたんですか？

輿水 ええ、それから、東京女子大学も、奈良も。もう、お茶の水から日本全国にこれが広がってるんです。

村田 ああ、そうですか。

梶川 それで、私達の着てるのも、何か、そういうふうな形のものなんです。

輿水 こうしてみますと、服装が、外国と比較して、モダンなんですな。

田村 梶川さんのお姉様が作って下さったのです。

輿水 向こうのものを参考になさいますか？

梶川 カタログは、やっぱり、こっちにはないから。向こうのものだったんでしょうね。

輿水 だから、モダンなんですな。あら、いい写真、

楽しい。

田村 それで、作っていただきましてね、そのユニフォームを手にして、三越なんかへ買い物に行きました時に、「今日はユニフォーム持ってらっしゃいますか。」って向こうで言うんですよ。「持ってますけど。」って言ったら、「こちらへいらして下さい。」なんて、貴賓室に通されちゃって、「どうか拝見させて下さい。」と言われてたりなんかしました。そして、それからあとが、おもしろいんですよ。普通のシャツだの、何か売っている店がございましてしょ。そういう洋品屋さんの店先に、「田村・梶川式ユニフォーム」って、ぶらさがって。おかしいですね、ぶらさがってたんですよ。

梶川 そしたら、みんな、テニスの時に、ここに黒いボタンが付いたのが、はやっちゃって。

田村 それで、ボタンが、そのパターンにあったんですよね。「ボタンはおかしいから、やめたらどうかしら。」なんて言う人もいましたが、そしたら、「ボタン、付いてたほうが、おもしろいわよ。」なんて、反対いう人もあって。ボタンの付いたままで私達が着ておりますでしょ。

奥水 ああ、これでございますね。

田村 富士絹の白で作りました、装飾のボタンが七つ位ついています。

編集部 このヘアーバンドは、どうなさったのですか？

梶川 あのね、やっぱり、絹で、汗をよくとるために当てたのです。

村田 今のと全く同じなのでびっくりしますね。

編集部 今も、こうやりますね。

梶川 そうなのね、ボルグなんて、やってるでしょう。神戸のハイカラな所に売ってたんですよ。それで、水玉模様の、幅の広いのもございましたし、こんな細いのもございました。

田村 水玉じゃないのよ。バラの花か何か。

梶川 バラの花。でも、ちょっと、水玉に見える……。このくらい幅の広いのね。

田村 新聞なんかに豆絞りなんて書かれたんじゃないの。

梶川 でもね、ここいらへんで、ちゃんと結んで、垂れたものね。今、考えたら、今の人みんなやっていますで

しょ、ボルグでも何でも。だから、やっぱり先端だった。また、戻ってきたんじゃない、流行だから。汗をとるためにね。中国、昔は支那人ね、その人たちは、こういうブルマーをはいていました。

奥水 これは何年頃ですか。

梶川 大正十二年の、大震災の前です。

奥水 そうすると人見さんより、一年位前ですね。だから私、そこがね、今はもう、人見さん 最頂点で、一番スタートみたいに、世の中では考えてるけれども、もっと、その前でいらっしやったんですね。

梶川 私達、先なんですよ。

奥水 私、ゆうべ、いろんな資料、一生懸命勉強して、そうだと思っていました。

田村 でも、私達のことだけは出してないわけなの。

学校が……、だって、靴下脱いでスパイクはいたら叱られたのですから。

奥水 これから出しましょうよ、世の中に。人見さんは、お出になったのが大正十三年ですよ。

梶川 私達は、テニスは十年からやって、いや、ランニングでも、そのくらいからやってたんじゃない？

奥水 ああ、素敵ですね。この新聞、何新聞で、いつかってこと、わかりますか。ああ、時事ですね。

田村 時事の、ここ、大正十一年五月二十九日、日曜日となっています。

極東大会

村田 極東大会のことを少し聞かせて下さい。極東大会なんかに出るっていうのは、やっぱり、人数の制限なんかあったと思うんですけど、如何ですか。

梶川 極東大会に出る場合は、まず、予選があったんです。

田村 予選的に、オール関東なんてのが、ございましたね。

梶川 オール関東があつて、オールジャパンがあつて、それで、全部勝った者が出たんです。それで、今度の第六極東大会には、女子のもやるから、勝った者が出て下さいってことになって、出たのよね。

田村 ええ、それで、大正十一年は、軟式で出たんですけれども、大正十二年に、極東大会があるので、十二年の春は、もう、硬球で出なくちゃならなくなりまし

て、急に、硬式に変わって。それで、何しろ、昔は、霜解けでございませよ、だから、三月終わりで、霜解けが終わらなきや、テニスができないんですよね。

奥水 そうですね。

田村 霜解けが終わってから、硬式に変えて四月始めの試合に。初めに、オールジャパンがあったんです。

奥水 それは、大正十二年？

梶川 十二年の四月ね。硬式になってからですから。

奥水 今、女性の体育史の中でも、その頃の、予選があったとか、そういう話は、全然出てないです。今、初めて伺いました。大変にニュースです。

田村 それで、第二回となっておりですけど、第一回は、秋の軟式の大会の時に、硬式の人が、四五人しかないのね、それで、第一回は、それだけの方が、私達が軟式の時に、その場でいっしょに、硬式の第一回があったわけですね。

梶川 あの時は、柳谷さんだの、安場さん、田さん^{でん}がお勝ちになったわね。

田村 当時は羽仁節子さんは、軽井沢にいらしたものですから、硬式やってらしたんです。だから、私達の先

輩なんですけどね。

梶川 羽仁さんは一番先でしょうね。

奥水 こういう貴重なものが、よくぞ。ああ、もう、びっくり。

田村 これが、ですから、まず、関東での予選になりまして、それから、関西とやりましたんです。そして、この時、ストレーラーてのはうまいんですけれど、何しろ、私達は、軟式から急に変わったばかりですから、まだ、球は、たぶん、ふわんとした球だったと思いますから、相手は打ちにくかったと思います。はっきり言って、当てるのが、まだわからなかった時代ですから。

梶川 ドライブがかかってたからね。

田村 ええ、変な球で。

奥水 いわゆる、今の、スピニングボールですね。今、一番流行じゃありませんか。

梶川 ええ、そうそう。

田村 その上、何でも走ってとればいいんでしょうって主義でしょ。前の年にランニングやっておりますから。だから、どんなのでも、駆け出して行って、とっちゃいますし、高けりゃ、とびつけばいいんですよ。

相手にしては、プリミティブのところへやっちゃったわけで、相手は、びっくりしちゃったんでしょ、きっと。

梶川 それでも、オリンピックの時は、三井さんがつれてって下さって。

田村 習っちゃったのね。

梶川 ボレーのやり方ね、みんな教えて下さった、外国のを教えて下さったんです。

奥水 大変なものですな。これが、そのメンバー？

梶川 メンバーです。私達、コーチが良かったのね。

熊谷さんだとか、鳥羽さんだとか、安部さんとか偉い方ばかりが教えて下さいました。

田村 鉢巻きしてて、これも、私達の後輩の人のお姉様が、神戸にいらしたものですから、その人が、それを買って下さって、私達のところに。この人が、その、背の高い人です。これが羽仁節子さん。これ、アッシャーって方。

奥水 ああ、そうですか。

田村 三井さんのお宅の家庭教師で。イギリス人か何かのお婆さん。

梶川 アッシャーさんね。

村田 これは、大変なことを、いろいろな伺いました。奥水 うれしいですわ、私、本当に幸せ。

田村 本当にね、歴史的なことでございます。もう、六十何年前のことですね。一九二三年ですからね。

奥水 大正十二年ですよ。

梶川 ずいぶん、昔。

奥水 でも、よくぞ、これだけとっておいて。

村田 本当にねえ。また後でっていうの、なかなか、その人でも不可能ですものね。極東大会は、テニスもあつたんですか。

田村 その年から、あつたんです。

村田 それは、特別なんですね。

田村 オープン競技としてあつて。

梶川 陸上競技も女子もあつたんでしょ。

田村 あつたんですよ。

梶川 あなた、出なかった？

田村 あつたには、あつたんでしょうと思えますけどね。

梶川 あの時、どなた出たの？ 御子柴さん？

奥水 女性はどうかだったのですか。

田村 オープンだったかな。

梶川 なかったかもしれないわ。

奥水 ほとんど男性中心で。

梶川 だって、テニスですら、オープンで迎えられた状態でしたからね。

幼稚園のこと

村田 話は変わりますけれど、御兄弟方がみなお茶の水の幼稚園と伺いましたが、当時の先生方はどなたでいらっしゃいましたか。

(お二人で卒業の時の写真を見ながら)

お二人 目白に幼稚園を作られた和田先生、倉橋先生、安井先生、池田先生、井村先生、坂内先生、雨森先生、これ明治四十五年ね。

村田 その頃の幼稚園のことは、よく覚えておいでになられますか。

梶川 やっぱり、幼稚園と小学校ね、一番懐しいのは。

田村 お池があって、築山があって。

梶川 今の運動場が似てるんですね、前のとおり、築山があって、砂場があって、割合に、やっぱり、昔のと

おり。

村田 そうでございますか。藤棚も覚えていらつしやいますか？

梶川 ええ、藤棚は、小学校寄りのところに大きなのがあって、卒業してからそこに集まったことがありました。

村田 幼稚園の時、おもしろかったとか、何か印象に残っていることございますか。どんなお歌をうたわれたのでしょうか。

梶川 今も、随分ありますね、その頃のお歌が。

村田 どんな歌ですか、歌って下さい。

梶川 ええとね、「むすんで……」だってそうでしょう。それからね、あれは何ですか、「今日のけいこもすみました」っての。

村田 今でも歌っているところ、ありますね。

奥水 もう、そんなモダンな歌、歌ってらしたんですか。

梶川 ええ、そうなんですよ。

村田 明治四十四年ですね。

梶川 それから、あと、何でしたっけ。七夕のうたなんか。私の知ってるのを、孫が歌っていると、とても、

うれしゅうございますよ。「あら、まだ、その歌あるの。」
って言ったものです。

輿水 一番モダンな歌をうたってた時期でしょ、ここ
がね。

梶川 よく、ままごとやってたわね。砂遊びとか。

田村 山を駆けおたり。

村田 ああ、そうですね。

梶川 ちゃんと、今こちらにあるのとよく似てる山が
あるんですね。私は、時々孫を迎えに来たりしており
ましたものですから、「お庭ながめると、あら、昔と似
てるわ。」なんて懐しく思っていました。

田村 遊動円木もありましたね、藤棚の方に。

村田 ここに堀七蔵先生がアメリカで見えいらして作
らせた、当時のジャングルジムが二つございますのよ
ね。今、ながめてみますと、間が狭いんです。やっぱ
り、それだけの体格の違いっていうのかしら。

梶川 ああ、そうですね。

田村 お話違うけど、及川先生が、先生の先生で、私
達小学校三年くらいの時、教えていただいたのね、及川
先生ってね。

梶川 及川先生、この間までいらっしゃった感じじゃ
ないかね。

田村 私の母が幼稚園におりました頃に、皇后様が
いらして、そのおみやげだっていうので、折本の、御伽
の、木版のきれいな本が里にございましたけど。

編集部 桃太郎じゃないですか。

田村 何か、木版の御伽の本で、割に、こう厚く折
本になって、きれいなものでしたけど。「皇后様のお
みやげなのよ。」なんて。

輿水 お母様も、幼稚園でらして。

田村 幼稚園の時。

梶川 もう、お母様、生きてらしたら九十いくつです
ものね。

田村 今、その母を知ってらっしゃる、九十四歳の
お婆ちゃまが、作楽会に、お習字のほうにいらっしゃ
るんですよ。

梶川 幼稚園は本当に楽しかったけれど、「何が」と
考えると、よくは分らないわね。時がたった、ってこと
ね。

小学校

奥水 やっぱり、小学校でもそうだったんですか。小学校の教育も、割合と大らかで、お受けになった？

梶川 厳しいってこともないでしょ。

田村 そんなに厳しくないけれど、でも。

奥水 お遊戯や何か、どうだったんでしょ。やっぱり、小学校や何かの教育も残ってなければ、そんなに素晴らしく、高等女学校で活躍されなかったでしょうね。

梶川 それはそうですね。やっぱり、お茶の水の基本をしっかりとなさった良さではないかしら。

田村 男の先生がいらして。

奥水 藤山快隆先生がいらして？

梶川 藤山先生がいらしてから。

田村 随分、盛んになりましたね。

梶川 結局、体育の先生の、ご指導でございますね、これ。

奥水 いい先生をお呼びになつて。やっぱり、日本を引っぱっていった方たちがいらしたから。

梶川 そうです。ですから。

奥水 田中せき先生だってそうですね。それから、二階堂先生。二階堂先生だってピカ一の外国帰りの先生ですね。

田村 文部省の留学生です。ああいう先生がやってらしたから、その教えを受けた先生が、そのまた生徒の方がみんな先生におなりになって、お残りになったんだから、優秀だった筈ね。

奥水 それに、家庭環境もよかったですでしょうし。

梶川 ちょうど、何て言うんでしょうか、大正時代で、割合に、自由主義って言うのか、時代も良かったんですよ。

奥水 そうですね、やっぱり、第一次世界大戦終了後の、いわゆる大正デモクラシーの時代ですね。

梶川 本当に時代が良かったと思うんですの。何でもが恵まれたんじゃないでしょうか。

奥水 やっぱり、あの時代ってのは、もう一回、評価しなおさなきゃいけない時代ですね。

梶川 そうですね。それでいてみんな、フワ〜っとしたような気持ちはないし、戦争後でしたから、みんなしっかりしたものを持ってたし、良かったんですね。

輿水 それから、運動お続けになったのは、その頃だけでございますか。

田村 そうですね。

梶川 私は、その後はゴルフしてました。

輿水 ゴルフを。あら、いつ頃から？

梶川 そうですね、戦後、私は結婚してから、満州、大連におりましたの、ずっと。ですから、運動は、テニスもやったし、ゴルフもいたしておりました。

輿水 あちらで？

梶川 はい。それで、第二次大戦後は、子供が大きくなりましたから、子供といっしょに、男の子なんかとゴルフしておりました。主人が目をわずらって、しなくたってから、私も遠慮しちゃって、いたしませんけど。

田村 彼女はホールインワンをなさったの。

全員 あらー、そうでらっしゃいますか。

村田 たくさん、いろいろなお話を伺っている間に時間がきてしまいました。長時間ありがとうございます。輿水先生のほうは、すごくたくさん資料がございましたね。

輿水 私、もう、すごく太りました。うれしいです。

村田 ぜひ、その御本や写真を、また見せていただきまして、その時代の知られないことを世の中に出したいような気が致します。本当に長時間、貴重なお話をたくさん聞かせて頂きまして、有難うございました。

この対談は、御二人の熱意と、尽きることのない思い出し満ち、また初めて何う者達の粘っこい質問に、延々四時間もの間続けられたが、まだまだという感じであった。長い記録の中から、これだけに纏めさせて頂いたことを御報告すると共に、福田様の御次男が、御うちに早稲田の庭球部の男性の方が嫌いだっただころ、幼稚園で赤組になり、それが気に入らないで、お遊戯なども見てばかりいたのに、緑組になっただころ、始めてしまった。という話とか、個性が強く、先生に手をかけて頂いた子の方が覇気があって、何でも一生懸命やって面白い。というお話しや、平野様も御兄弟がたくさんが園にいらしたので、お弁当を落したりすると、「姉のところへ行ってごはんを貰ったりした。」という思い出話しが、当時の雰囲気をはうふつとさせていて、それ等のお話から、幼児の教育に参考となるいろいろなことをお教え頂くことができました。

(村田 記)